大城ひかるのベトナム通信

シンチャオ（Xin chào）おきなわ

物々交換で愉快な貧乏生活

ホーチミン市内で開発が進む高級アパート。住民が利用できるプール付き（松野本絢美撮影）

ベトナムに来る前に決めたことがあります。それは「貧乏生活を楽しもう」ということです。効率的で、快適で、高品質を追求する日本の生活とは一線を画し、不便でも、快適でなくても、その中から楽しさを見つけたいと考えたのです。部屋探しの後、私はさっそく行動を開始しました。社内の日本人同僚に不用なものがないかを聞き、ホーチミン沖縄県人会のラインングループでも同様に呼びかけたのです。

すると、来るわ来るわ。まず日本人同僚がワンドアの小型冷蔵庫と全自動洗濯機をタダでくれました。ちょうど引っ越し予定だった上司はソファーテーブル、お玉、ターナーをくれました。日本に帰る同僚からは机と椅子、本棚、洗濯干しが届きました。ついでにアイロンももらったのですが、すでに持っていたので、それはすぐ近くのベトナム人の同僚にあげました。

沖縄県人会のA氏からは食器と鍋一式をいただきました。本土に本社がある会社のホーチミン支社長をしているA氏はお子さんの進学で奥さんと子どもが日本に帰ってしまい、自分では料理しないため、大量の食器一式をきれいに物入に閉まっていたのですが、わざわざ引っ張り出してきて、好きなものを選ばせてくれました。ちなみにA氏の自宅はホーチミン中心部の高級サービスアパートで、聞くと家賃は1500USドル。ビールを手土産にA氏宅までバスで行ったのですが、帰りもバスで帰ろうとする私に、A氏はしつこくタクシーで帰れと勧め、結局私はタクシーを呼ぶ羽目になりました。県人会の集まりでは、いまでも酔ったA氏に大きな荷物を持ってバスに乗ろうとしたことをからかわれることがあります。貧乏生活の大敵は金持ちの友人のようです。

沖縄に帰る30代のY夫妻からは炊飯器とオーブントースター、電磁調理器と食器類をいただきました。彼らはサイゴン川を渡った2区の新興住宅地に住んでいて、そこまでのバスの旅も楽しかったのですが、バス停を降りて片側4車線の横断歩道のない道を渡らなければならず、広大な敷地の何棟もの高層マンションの中から目当ての建物を探すのは至難の業で、帰りのバスもなかなか来ませんでした。ここは配車アプリを使うべきだったのですが、あとで分かることもたくさんあります。

もらったものが重なった時は、周りに声をかけ必要な人を探しました。県人会のK社長からもらった電気ポットは日本人同僚にあげ、代わりにフォーをおごってもらいました。その電気ポットは彼の帰国の際、同じアパートに住む日本人同僚に渡り、さらに彼女の帰国時にはベトナム人の学生がもらっていきました。電磁調理器は日本人同僚にあげ、代わりに彼女からは扇風機をもらいました。

このような活動をするうち、いつの間にか私は日本に帰国する先生方のモノの処分係になってしまいました。いろんなものを託されますが、そこは「捨てる神あれば拾う神あり」。私の愉快な貧乏生活はこれからも続きます。

（ご意見・ご質問をお聞かせください。oshiro@kaizen.edu.vn）